

# シリーズ—研究者の横顔 (Vol.04) —

心理学グループ

浅野倫子先生・実験補助の学生たち

知覚・認知心理学班である日高先生と浅野先生は、知覚・認知心理学の固有の方法論を活かしながら、同時に生命理学科と協力して唾液中のストレス関連物質との量との関係も調べつつ、日常的に感じている「心理ストレス」について研究されています。今回は、実際に実験をやっている場にお邪魔し、浅野先生と、実験実施者として協力している日高ゼミの4年次生である松山くんと田丸くんに話を伺いました。

## ■“実験実施者”として

—実験実施者として協力することになったきっかけを教えてください。

松山くん「卒論で扱うテーマが、この研究と少し似ていたこともあって、日高先生から『実験を手伝ってみない?』と声をかけられたことから始まりました。」

田丸くん「僕は今年の春、新入生向けのオリエンテーションで浅野先生の手伝いをしたときに声をかけられたんです。」

—実際、実験実施者として参加してみてもうですか？

松山くん「実験をするときには、器具の配置や教示文の内容までしっかりと決めてから実施するものなんだと学びました。まだまだそういうことも分かっていなかったもので、とても勉強になりましたね。」

田丸くん「僕も同じ感想です。でも、きっちりやり方が決められているので初めてでもやりやすいです。あらかじめ決められた手続きに則って実施すればよいので、慣れてしまえばあまり苦ではない感じです。」

松山くん「日高先生や浅野先生からのフォローアップがあるので、安心して実施できています。でも、今日久しぶりにひとりで実験を実施したらすごく焦りました。半年くらいやっていなかったもので…。」

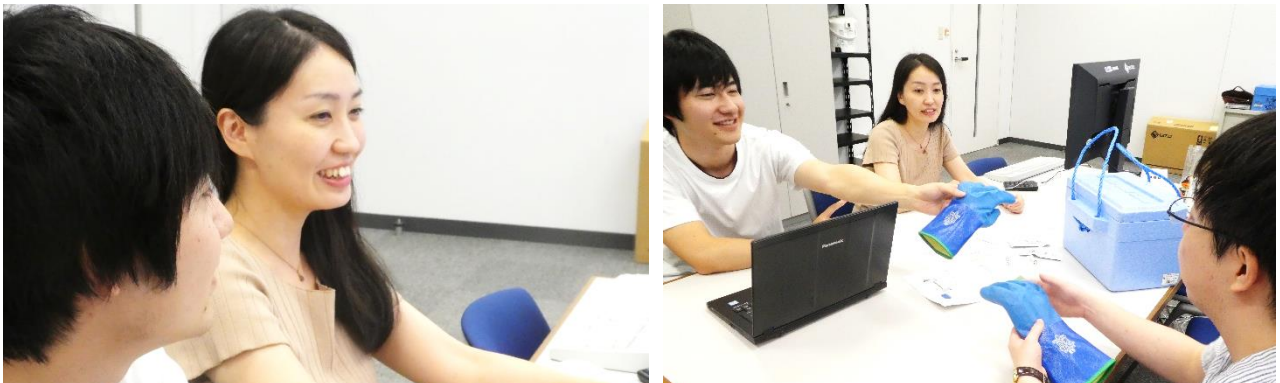


松山くん(写真手前)と田丸くん(写真奥)は現代心理学部の4年次生で、“唯二”の日高ゼミ生。松山くんは昨年からの実験実施に協力しており、今年で2年目。今年の4月に新たな実験実施者として田丸くんが加わった。

—浅野先生、2人が実験実施者として協力してくれてどうですか？

浅野先生「ものすごく助かっています！これを私一人でやろうとしたらパンクしてしまうと思います。参加者に唾液採取キットを渡して、採取の仕方を説明して、その後持ってきてくれた唾液を受け取ってからまた実験を行って…とデータをとるだけでも2日かかるので一人では大変なんです。

まず実験参加に応募してくれた学生と日程調整をすることから始まって、実験内容の説明をし、さらには参加者が唾液を採るのを忘れないようにリマインダーも送ってくれています。地道な作業ですが、質の良いデータを収集するためにはいずれも欠かせません。2人がいてくれて本当に助かっています。」



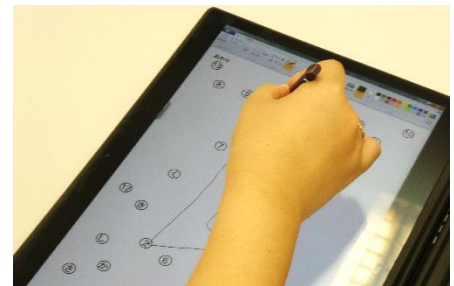
今回の取材に対し、「2人がどんな気持ちで協力してくれているのか知ることができてよかった。」と話す浅野先生(写真左・奥)。終始和やかな雰囲気で行われ、大変さの中にも実験の楽しさがみえてくる。

## ■“参加者”として

松山くんも田丸くんは、以前予備実験の参加者としても参加していた。「実験に参加すること自体は好きなので、楽しみながら参加できた」と話す松山くんと、「心を“無”にして参加していたかも」と笑いながら話す田丸くん。

さらに、この日は現代心理学部2年次生が参加者として実験に参加していたため、最後にこの学部生にも実験に参加した感想を伺いました。

「卒論の実験には何度か参加したことがありましたが唾液をとるような実験は初めてだったので、正直最初は心理学っぽくないなと思いました。でも、実際に参加してみたら面白かったです。今まで臨床系しか知らなかったけど実験系の研究も面白いかもと思いました。」



10月9日に、実際の実験場面にお邪魔し、取材にご協力いただきました。このように、ブランディング事業の研究は大学の先生だけでなく、学部生も協力して行われているのですね。今後の研究のご発展をお祈りしています。(取材担当:教育研究コーディネーター 坂本真季)